シニアとパソコン

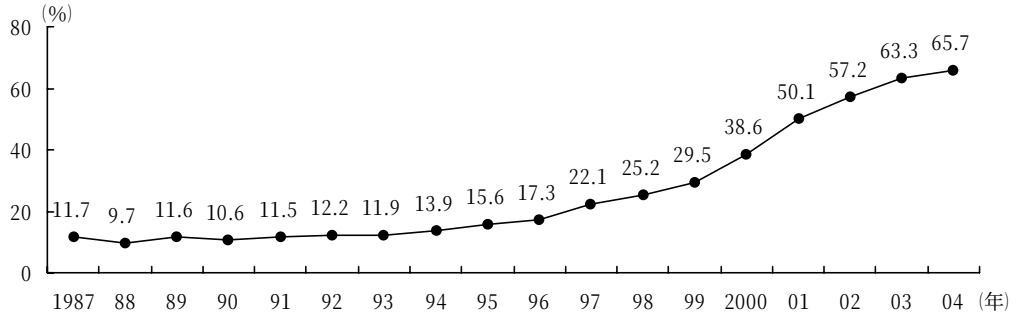
研究開発室
水野 映子

＜シニアのパソコン利用率は依然低い＞

今や日常生活にすっかり溶け込んだ感のあるパソコン。内閣府の「消費動向調査」によると、世帯におけるパソコンの普及率は2004年３月現在で65.7%であり、過去10年間で50ポイント以上増えている（図表１）。また、総務省が毎年実施している「通信利用動向調査」によれば、過去１年間にパソコンを利用した人の割合（以下、利用率）は、６歳以上の人のうち2003年では44.6%と半数近くを占めている。

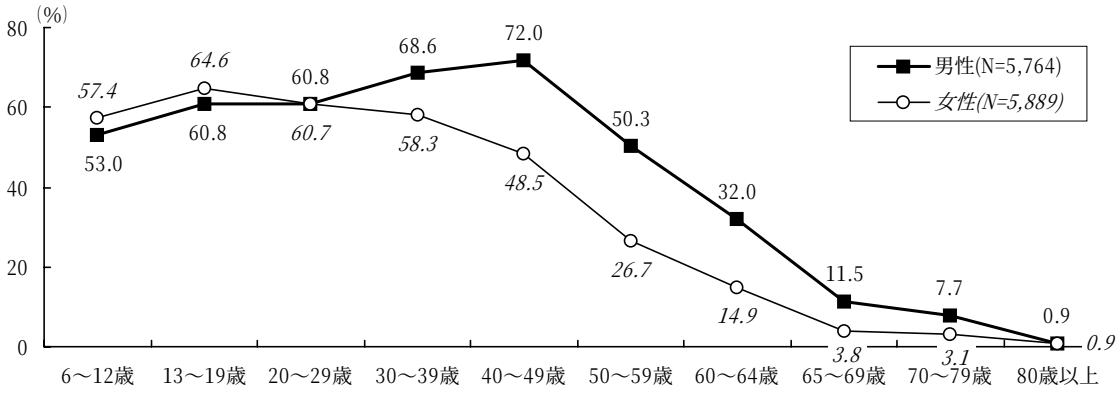
しかし、パソコンの利用率は属性によって大きく異なる。図表２で性・年代別に利用率をみると、男性の13～49歳では６割を超えているが、50歳以上では年代が上がるごとに低くなっている。また、女性シニアの利用率は男性をさらに下回り、50代、60代前半では同年代男性の半分程度、65歳以上では全体の５%未満でしかない。多くのシニアにとって、パソコンはまだ身近な存在にはなっていないようだ。

図表1　世帯におけるパソコンの普及率



資料：内閣府「平成16年３月 消費動向調査」

図表2　パソコン利用率（性･年代別）



資料：総務省「平成15年 通信利用動向調査」

＜パソコン操作の難しさがネックに＞

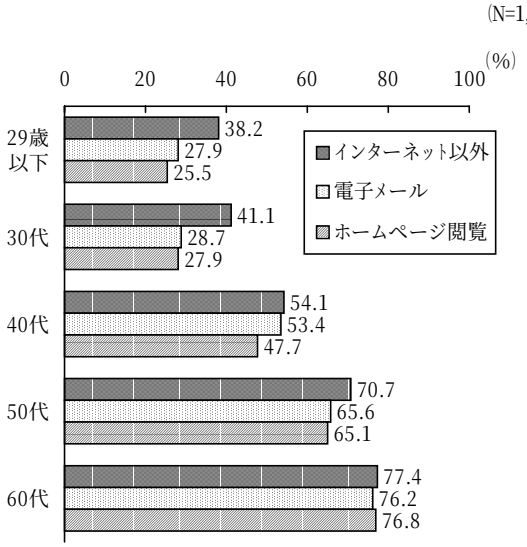
パソコンを利用するシニアが少ない要因はさまざま考えられるが、使い方の難しさもその１つであろう。当研究所は2003年に18～69歳の人を対象に実施した調査において、パソコンを使って「文書やハガキの作成、表計算、ゲーム、写真処理などで、インターネットを使わない作業（以下、インターネット以外）」「電子メール」「ホームページ閲覧」をすることについて、それぞれどの程度難しいと感じるかをたずねている。

図表３に示す通り、「インターネット以外」を難しい（「難しい」＋「どちらかといえば難しい」）と感じる割合は、年代が上がるにつれて高くなっており、50代以上では７割を上回っている。また、「電子メール」「ホームページ閲覧」を難しいと答えた割合も、やはり上の年代ほど高くなっている。

さらに、「インターネット以外」を難しいと感じる人の割合を年代別・利用頻度別に分析すると、図表４のようになる。これをみると、パソコンの利用頻度が低い50代以上の人では、難しいと感じる割合が８割に達している。パソコンは難しい、というイメージがシニアのパソコン利用を妨げる一因になっていると思われる。

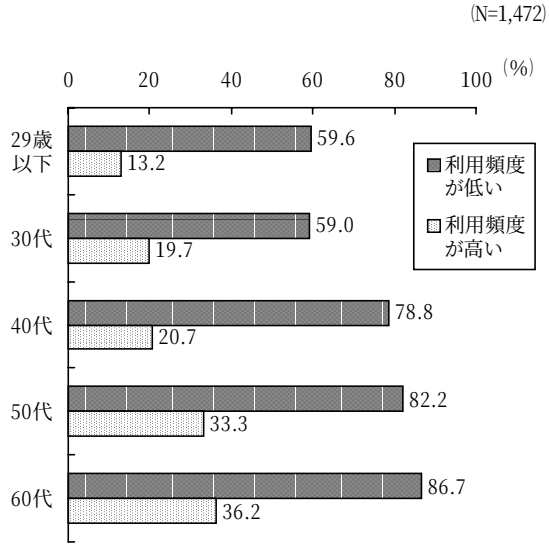
一方、利用頻度の高い人がパソコンを難しいと感じる割合は、利用頻度の低い人に比べるとかなり少ないものの、年代が上がるごとにやはり高くなり、50代以上では３割を超えている。パソコンをふだん使っているシニアですら、若い世代よりはパソコンに対して難しさを覚えていることがわかる。

図表3　パソコン（インターネット以外、電子メール、ホームページ閲覧）を難しいと感じる人の割合（年代別）



資料：第一生命経済研究所が2003年１月に実施した「今後の生活に関するアンケート」のデータを使用した。
なお、この調査の他の結果は、『ライフデザイン白書2004-05』（当研究所発行、2003年10月）で紹介している。

図表4　パソコン（インターネット以外）を難しいと感じる人の割合（年代・パソコンの利用頻度別）



注　：「よく利用する」「ときどき利用する」と答えた人を利用頻度の高い人、「あまり利用しない」「利用したことはない」と答えた人を利用頻度の低い人とした。
資料：図表３と同じ

＜低くないパソコン学習意欲＞

では、シニアはパソコンの使い方を習得することには関心がないのだろうか。当研究所が実施した前述の調査では、「パソコンなど情報通信」を含む12の分野について、今後継続的に学んでみたいと思うかどうかも質問している。

図表５で性・年代別にみると、「パソコンなど情報通信」について今後学んでみたいと答えた人の割合は、男性50代・60代では約３分の１であり、他の年代に比べると低いものの、全学習分野の中では最も高い。また、女性50代においてもその割合は３割を超え、「音楽・美術・華道・舞踊など芸術・芸能」の分野に次いで２位となっている。シニアのパソコン学習意欲は、若い世代ほどではないにしろ低くないといえる。

図表5　今後学んでみたい分野（性･年代別、複数回答）

※上位３分野のみを掲載（単位：%）

		1位		2位		3位	
男性	29歳以下	**パソコンなど情報通信**	**38.3**	スポーツ	35.7	英会話など外国語	21.7
	30代	**パソコンなど情報通信**	**38.6**	スポーツ	29.8	英会話など外国語	20.2
	40代	**パソコンなど情報通信**	**42.9**	スポーツ	28.6	ﾎﾋﾞｰ･ｸﾗﾌﾄ･ｺﾚｸｼｮﾝなど	17.7
	50代	**パソコンなど情報通信**	**33.5**	スポーツ	24.2	地域活動やﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動	17.6
	60代	**パソコンなど情報通信**	**33.1**	歴史や文学など一般教養	23.6	スポーツ	22.3
女性	29歳以下	**パソコンなど情報通信**	**38.2**	スポーツ	27.2	英会話など外国語	26.5
	30代	**パソコンなど情報通信**	**33.8**	スポーツ	33.1	英会話など外国語	21.2
	40代	スポーツ	29.5	**パソコンなど情報通信**	**28.0**	―	―
				芸術・芸能	28.0		
	50代	音楽･美術･華道･舞踊など芸術･芸能	33.0	**パソコンなど情報通信**	**30.7**	スポーツ	21.6
	60代	音楽･美術･華道･舞踊など芸術･芸能	33.9	スポーツ	19.3	**パソコンなど情報通信**	**17.5**

資料：図表３と同じ

かつては、IT 基礎技能講習（IT 講習）が政府の主導により全国各地で開催され、2001～2002年の間にはシニアを含む約520万人もの人が参加した（総務省調べ）。しかし、政府の予算交付の終了の後、多くの IT 講習は縮小・廃止されてしまっている。

こうした中、シニア自らが中心となってパソコン学習を支援する動きもある。例えば、東京都大田区の「元気かい」のパソコン教室もその１つである。60歳以上の人を会員とするこの会は、介護予防を目的とするさまざまな活動に取り組んでいる。パソコン教室は、会の発足当初に実施したアンケートで、会員からの希望が最も高かった活動だ。パソコン教室の人気はスタートから２年が経過した今も衰えず、定員はいつもすぐにいっぱいになる。ただ、受講者からの参加費のみで運営しており、専用の会場もないため、教室の規模を現在以上に広げることは難しい状況にあるという。

今年は、「５年以内に世界最先端の IT 国家となること」を目指した「e-Japan 戦略」の目標年にあたる。年齢や身体的な条件、地理的な制約などによって生じる「デジタルディバイド」、すなわち情報通信技術の利用機会や活用能力の格差は、e-Japan 戦略においても常に重要な問題の１つとされてきた。年齢によるデジタルディバイドを是正するためにも、シニアの IT 能力向上を支援する方法について、改めて考える必要があろう。